

平成 2 1 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18710209

研究課題名（和文） インド洋におけるアラブ（ハドラーミー）のネットワークに関する
基礎研究

研究課題名（英文） Basic Research on Arab (Hadrami) Network in the Indian Ocean

研究代表者

新井 和広 (ARAI KAZUHIRO)

慶應義塾大学・商学部・講師

研究者番号：60397007

研究成果の概要：

南アラビアのハドラーマウト地方（イエメン）と東南アジア双方で文書収集・聞き取り調査を行うことにより、インド洋におけるアラブ（ハドラーミー）移民とその子孫が作り上げたネットワーク、特にアラウィー・タリーカを軸とする人のつながりを 1990 年以降の状況に注目して明らかにした。同時に、日本では入手不可能であったハドラーマウトとハドラーミー移民に関する基礎文献を購入して大学図書館に納め、日本における今後の研究の礎とした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	150,000	3,050,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：地域研究、東洋史、中東研究、ディアスポラ研究、東南アジア研究

1. 研究開始当初の背景

インド洋におけるアラブの移民活動は従来からその重要性が指摘されていたが、本格的な実証研究が始まったのは 1990 年代以降である。「アラブ」とは言うものの、そのほとんどは現イエメン共和国東部のハドラーマウト地方出身者（ハドラーミー）であり、彼らが東アフリカ、インド、東南アジアとの間に張り巡らせたネットワークは本国及び移住先の社会、経済、宗教活動に大きな影響を与えてきた。このネットワークは第二次世界大戦後、インド洋沿岸に成立した国民国家が人

の移動や送金を制限したため急速に衰えたものの、現在でも人的交流は存続している。

東南アジアのイスラーム急進派にアラブ系（ハドラーミー）が多いという事実もあり、最近では東南アジアを調査地とする研究者もハドラーミー・ネットワークに注目するようになった。しかし、ハドラーマウトやハドラーミー移民に関する資料は、基礎的な文献であっても日本ではほとんど入手することができない。これは、今まで日本ではハドラーマウトを専門とする研究者がいなかったこと、ハド

ラマウトに関する文献の多くは小規模出版社から出版されており、ハドラマウトやインドネシアのアラブ系書店などに直接行かなければ入手できなかったことが原因である。今後の研究を促進するためにも、当該分野に関する資料の整備や、網羅的な文献目録の作成が求められている。

近年では研究者だけでなく、日本を含む各国のマスコミもハドラーミー・ネットワークに注目している。しかし、オサーマ・ビン・ラーディンがハドラーミー移民の子孫であるという事実などから「テロリスト・ネットワーク」との関連を示唆するもの（例えば朝日新聞2005年10月12日朝刊15面）など、ハドラーミー移民の特殊な一面のみに注目する報道が多い。実際、ハドラマウトの宗教（イスラーム）活動において指導的役割を果たしてきたサイドと呼ばれる人々（預言者ムハンマドの子孫）や、彼らが中心となっているアラウィー・タリーカ（いわゆるイスラーム神秘主義教団）には急進的な側面は見られない。ハドラーミー移民の多様な側面を明らかにすることが必要である。

学術研究においても、ハドラーミー移民の多様な側面に光があてられてきたとは言いがたい。移民に関する研究ということで、従来は移民活動の経済的な側面に注目した研究が多くなされてきた。しかし、彼らが与えた影響は経済の領域のみにとどまらない。イスラームに関する知識を持った移民は商業活動と共に宗教活動、具体的にはモスクや学校の建設、移住先の住民への教育や、慈善事業を行った。宗教活動を行った者の一部は死後に聖者とみなされ、子孫によって建てられた廟には現在まで参詣者が訪れている。ハドラーミー移民の研究はインド洋沿岸地域におけるイスラームの展開とも大きく関わっているのである。

ハドラマウトや移住先の社会で、特に宗教・学術・文芸活動を活発に行っていたのは上述のサイドたちである。実際、ハドラマウトにおける歴史研究のほとんどはサイドによって書かれた史料に基づいたものか、サイドの活動に焦点をあてたものであった。しかし、現在までのところ、彼らの「心の拠り所」となっているアラウィー・タリーカの教義や、それがインド洋におけるアラブ（ハドラーミー）のネットワークに与えた影響に注目した研究は十分なされていない。1990年代以降、アラウィー・タリーカを軸とした人的つながりがハドラマウトとインド洋沿岸地域の間で再び盛んになっているが、この現象を扱った研究はほとんどない。

2. 研究の目的

以上の問題関心に基づいて、本研究では以下の3点をその目的とする。

(1) インド洋におけるアラブ（ハドラーミー）の移民活動に関して、特にハドラマウトと東南アジアの関係に注目し、ハドラーミーの宗教活動の主流であったアラウィー・タリーカの教義・活動を、メンバーの著作の解析と聞き取りを通して明らかにする。その際、1990年代以降ハドラマウトで活発な教育活動を行っているダール・アル=ムスタファーという宗教教育機関に注目する。

(2) 日本では整備が遅れているハドラマウト及びハドラーミー移民関連文献をハドラマウト、東南アジア両地域で購入し、日本で利用できる形にする。

(3) 主要な文献資料の解題をまとめることで、今後の研究の便宜を図る。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題では、聞き取り調査と文献研究を二つの柱とする。初年度の調査はハドラマウト側に注目し、学術活動の中心都市であるタリームのダール・アル=ムスタファーで、学長のウマル・ビン・ハフィーズ氏（ハビブ・ウマル）及び彼の生徒（東南アジアからの留学生も含む）に聞き取り調査を行う。その際には、現地の協力者（タリームで出版業を営むアブドゥルラフマーン・バルファキフ氏やサイウーン博物館館長のアブドゥルラフマーン・アル=サッカーフ氏など）にインフォーマント紹介等の便宜を図ってもらう。

(2) 二年目の調査は、東南アジアで行う。具体的にはインドネシアのジャカルタに本部を置く「アラウィー連盟」、「ダルル・アイタム」ほかサイドが中心になって運営している団体や、アラブ系の有力者に聞き取りを行い、ダール・アル=ムスタファーの東南アジアにおける活動についての情報を収集する。特に、ダール・アル=ムスタファーが東南アジアとのつながりを構築した経緯を、キーパーソンの人的つながりをもとに解き明かすことに重点を置く。同時に、図書館・文書館でハドラーミー関係資料の所蔵状況の調査を行う。

(3) 聞き取り調査・文書調査と共に、ハドラマウトと東南アジアで当該分野関連書籍を購入する。このような書籍は概ね小規模出版社で出版された後、短時間で絶版になること

が多い。そのため、現地の出版事情をよく知る人物（ハドラマウトではタリームで出版業を営んでいるアブドゥラフマーン・バルファキーフ氏、東南アジアでは東ジャワのグレシクでハドラミーに関する文献（書籍、写本）を収集しているムハンマド・ビン・ハーシム氏）に協力を仰ぎ、過去に出版された書籍のうち、特にハドラマウト研究に必要であると考えられるものを収集する。

(4) ハドラマウトと東南アジアでの調査を受けて、日本では収集したデータの整理、購入した書籍の書誌情報の入力等を行う。そして主な史資料の解題を行う。

4. 研究成果

(1) ハドラマウトの宗教学校、ダール・アル＝ムスタファーの活動と人的ネットワークのうち、東南アジアと関連する部分が明らかになった。先行研究ではダール・アル＝ムスタファーの教育・宗教活動をハドラマウトのみに注目して論じたものがほとんどであったが、実際にはダール・アル＝ムスタファーは設立当時から東南アジアとの関係を重視しており、留学生の数においても、学長であるハビブ・ウマルの訪問先においても、東南アジアの重要性が特に高いことが分かった。ハドラマウトと東南アジアの人的つながりは第二次世界大戦以降急速に衰退し、インド洋をまたいだアラブ（ハドラミー）のネットワークは過去のものとして扱われることが多いが、本研究において明らかになったのは、1990年代以降に新たな人的交流、しかも宗教を軸にした人の行き来が起きているということ、そしてこの人的交流は旧来の人のつながりを基盤としながら、新たなネットワークを作り出していることである。この事実はハドラマウトとハドラミー移民の歴史認識に新たな展開をもたらす可能性があり、今後調査を続けることにより国内外でインパクトのある成果を出すことが期待できる。以下、調査の内容と明らかになったことを簡潔に説明する。

2006年度に行われたハドラマウトにおける調査では、ダール・アル＝ムスタファー学長、ハビブ・ウマルに面会し、学校の概要、ウマル氏が毎年東南アジアを訪問している理由や、氏が東南アジアに持っている人的ネットワークについて情報収集を行った。同時に、東南アジアからダール・アル＝ムスタファーに留学している学生（インドネシア人、マレーシア人など）にも聞き取りを行い、ダール・アル＝ムスタファーを勉学の場所として選択した経緯等の情報を得た。

この結果を受けて 2007 年度においては東南アジア側に注目し、インドネシアで調査を行った。ここでの目的は、ダール・アル＝ムスタファーの卒業生に聞き取りを行い、卒業後の進路に関する情報を収集することであった。たまたま研究代表者によるインドネシア調査と、ハビブ・ウマルの東南アジア訪問の時期が重なっていたため、ジャカルタ郊外で開催された、ウマル氏とインドネシアの宗教教師約 250 名が参加する会議にオブザーバーとして参加することができた。そしてこの集会のプログラムや参加者の傾向、ウマル氏による講演の内容を調査した。その結果、この会議へ招待された宗教教師の多くは非アラブ系であるが、アラブ系の人物と個人的なつながりを持っていることなどが明らかになった。また、会議におけるウマル氏の講演内容は、時代の要請に基づくもの（たとえば現代社会におけるイスラームの役割など）というよりは、いわゆる古典的なイスラームの思想に関するもの主であることが分かった。

ハビブ・ウマルの東南アジアにおける活動に加え、ウマル氏の旅程と各地での行事を誰が手配しているのかについても調査を行った。その結果、ダール・アル＝ムスタファーの卒業生、つまりウマル氏の弟子で、東南アジアで宗教教師となっている者が中心的な役割を果たしていることが分かった。また、年によっては、会議・講演会の手配の一部をアラウィー・タリーカ系の団体（アラウィー連盟など）が担当していることも明らかになった。

東南アジアからダール・アル＝ムスタファーへ留学生を送り出す体制については、ジャカルタ在住のアラブ有力者、アブドゥラフマーン・ブン・シャイフ・アル＝アッタース氏に聞き取りを行った。その結果明らかになったことは、最初はアラブ有力者の有志が留学希望者の審査、渡航の手配、必要であれば留学資金の支援を行っていたが、現在ではダール・アル＝ムスタファー自体がジャカルタに事務所を構え、留学に関する業務を行っていることである。

そこで 2008 年度には補足調査として、ジャカルタ（インドネシア）のダール・アル＝ムスタファー事務所において責任者に聞き取りを行った。その結果、留学生の受け入れ状況、帰国した留学生の東南アジア内のネットワークの現状、ハビブ・ウマル（ダール・アル＝ムスタファー学長）がどのように東南アジアとのつながりを構築したのかについての情報を得た。その結果、1990 年のイエメン統一以降にハドラマウトへのアクセス

が自由になり、東南アジアとの人的交流が可能になったことがハビーブ・ウマルのネットワーク形成に大きく影響しており、特にジャカルタ在住のアラブ系実業家が1992年にハドラマウトを訪問した時、ハビーブ・ウマルと出会ったことがその後のダール・アル=ムスタファーの東南アジアでの活動に道を開いたことが明らかになった。

(2) ダール・アル=ムスタファー以外でも、東南アジアにおいてアラウィー・タリーカ関連の活動が活発化していることが明らかになった。これは20世紀前半から活動しているアラブ団体の再活性化や、アラブ系聖者にちなんだハウルという宗教行事が盛んになっていることなどに見ることができる。たとえば2000年以降、ジャカルタではシャイフ・アブー・バクル・ブン・サーリムというハドラマウトの聖者にちなんだハウルが新たに開始されたが、この聖者は16世紀のハドラマウトで活躍した人物である。従来のハウルはその地で没した聖者の墓廟で行われることが多いが、このハウルはハドラマウトで没した聖者の偉業をジャカルタにある聖者の子孫の自宅で称えるという興味深い体裁をとっている。アラブ系住民の間で宗教活動が活発化しているという事実はスハルト以降のインドネシア・イスラームの展開を議論する上でも重要と考えられる。本研究ではまだ個別の成果として発表できるだけの情報を収集したわけではないが、今後十分発展が見込めるテーマだと考えている。

(3) ハドラマウトと東南アジアにおいて当該分野関連書籍の出版状況に関して調査を行い、日本では絶対的に不足しているハドラマウト関連書籍を購入した。その結果、ハドラマウトでは約150冊(アラビア語)、インドネシアでは約50冊(インドネシア語、アラビア語)の書籍を入手し、東京外国語大学図書館に納めることができた。これによって日本においても当該分野の基礎文献を読むことができるようになったほか、東京外国語大学図書館はハドラマウトとハドラミー移民に関しては世界でも有数の蔵書数を誇る図書館になった。

(4) インドネシア国立図書館(ジャカルタ)、シンガポール国立図書館、シンガポール大学図書館、アル=アハカーフ写本図書館(タリーム、ハドラマウト)等において文献調査を行い、関係資料のリストアップを行った。これらの史資料や購入した文献の中で特に重要なものを選び出して解題を行い、「ハドラマウト研究入門」のような形で学術雑誌等に出版する予定である。ハドラマウトに関する研究は、『イスラーム世界研究マニュアル』

(名古屋大学出版会、2008年)など、研究の道案内とも呼べる文献でも取り上げられておらず、出版すれば日本で初の試みとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Arai, Kazuhiro. "An Attempt to Reform Hadramawt in the Early Twentieth-Century: A Preliminary Consideration on the "Truth Society (Jam'iyyat al-Haqq)" of Tarim." *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, no. 65, pp. 91-112, 2007. 査読無し。

[学会発表](計1件)

新井和広「商人か、宗教者か 東南アジアへのアラブ移民の歴史」、第53回国際東方学会会議・東京会議、2008年5月16日(金) 日本教育会館(東京)

[図書](計1件)

ARAI, Kazuhiro. "The Human Network Surrounding an Arab Religious Figure in Southeast Asia who Appears in the Literature: The Case of 'Abd Allāh b. Muhsin al-ʿAttās in Bogor." In Ishii, Yoneo (ed.). *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the 19th and 20th Centuries*. Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 141-157, 2009. 査読無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 和広 (ARAI KAZUHIRO)
慶應義塾大学・商学部・講師
研究者番号：60397007

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし